837
4
35

萬葉集新考

二

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35

ガラス使用

837-35

萬葉集卷第一

雜歌

泊瀬朝倉宮御宇天皇代
天皇御製歌

高市岡本宮御宇天皇代
天皇登香具山望國之時御製歌

天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌 并
短歌

幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌 并 短歌

根岸信輔氏寄贈
根岸憲助氏委託本
曽山文庫
昭和十二年 帝國圖書館藏

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

明日香川原宮御宇天皇代
額田王歌
後崗本宮御宇天皇代
額田王歌
幸紀伊温泉之時額田王作歌
中皇、命往于紀伊温泉之時御歌三首
中大兄三山御歌一首 并短歌二首
近江國大津宮御宇天皇代
天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之艶秋山

（本文は「国」の字かきそ　よ記其義も挙たよ云）

千葉之彩時額田王以歌判之歌
額田王下近江國時作歌井戸王和歌
天皇遊猟蒲生野時額田王作歌
明日香清御原宮御宇天皇代
十市皇女參赴於伊勢大神宮時見波多横山巖吹
黄刀自作歌
麻續王流於伊勢國伊良虞島之時㊟時人哀痛作歌
麻續王聞之感傷和歌
一云天皇御製歌　或本歌

二

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

天皇幸吉野宮時御製歌

藤原宮御宇天皇代

天皇御製歌

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌一首并短歌

高市連古人感傷近江舊堵作歌一首或書高市黒人

幸紀伊國時川島皇子御作歌

阿閇皇女越勢能山時御作歌

幸吉野宮之時柿本朝臣人麻呂作歌二首并短歌

二首

幸伊勢國之時留京柿本朝臣人麻呂作歌三首當

麻真人麻呂妻作歌石上大臣從駕作歌

輕皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麻呂作歌一首并

短歌四首

藤原宮之役民作歌

從明日香宮遷居藤原宮之後志貴皇子御歌

藤原宮御井歌一首并短歌

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸紀伊國時歌二首

或本歌

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35

ガラス使用

二年壬寅太上天皇幸参河國時歌　長忌寸奥麻呂一首　高市連黒人一首　誉謝女王作歌　長皇子御歌　舎人娘子従駕作歌

三野連名湍入唐時春日蔵首老作歌

山上臣憶良在大唐憶本郷作歌

慶雲三年丙午幸難波宮時歌二首　志貴皇子御歌　長皇子御歌

太上天皇幸難波宮時歌四首　置始東人作歌

高安大島身人部王作歌　清江娘子進長皇子歌

太上天皇幸吉野宮時高市連黒人作歌

大行天皇幸難波宮時歌三首　忍坂部乙麻呂作歌　式部卿藤原宇合長皇子御歌

大行天皇幸吉野宮時歌　或云天皇御製歌　長屋王歌

和銅元年戊申天皇御製歌　御名部皇女奉和御歌

三年庚戌春二月從藤原宮遷于寧樂宮時御輿停

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

長屋原遊望古郷御作歌一書歌
五年壬子夏四月遣長田王伊勢齋宮時山邊御井
作歌三首
寧樂宮　此標ハ上ニあり和銅元年云々の處ニ在ヘ
　　さゝしおやハ　さわり又此よ御宇天皇代ヤ云云ハヤ死
　　本文にいふり
長皇子與志貴皇子宴於佐紀宮歌　長皇子御歌
此錄の事。代匠記云第二十巻ノ仙覚ノ奥書ヲ見ルニ
古本ニ三ッノ異アリ一ッニハ總テ十キ本ニ第十五マテアリテ十
ハ總テナキ本三ッニハ第十五マテアリテ十
六以下ナキ本十リ目錄ハ大キニ誤レル事
アリテ後人ノシワサトス

雑歌

是ハ類を分たず挙ぐるの目なり

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　大泊瀬稚武天皇

雄略天皇の御代ゐるよし法標(云ヒ)あり古は前代

乃天皇よ某宮御宇天皇と申す例ぬ

天皇御製歌

是ハ正しく須賣良美許登乃於保美宇多と

訓へきたゞおれ毎此集の端詞は大かた

漢文ふうの志て強く訓難き語とも雑まり

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35

ガラス使用

は總て訓を記さず左（カシ）右（カシ）ようはしくも
よみ得（ウ）ずしけん婆訶

籠毛與美籠母乳布久思毛與美夫君志持此岳爾菜
採須兒家吉閑名告沙根虚見津山跡乃國者押奈戸
手吾己曽居師告名倍手吾己曽座我許者背齒告目
家乎毛名雄毛

籠毛與ハ三言の句初りて調をふるのみにて籠ハ古ふるき訓なり古ヘも訓ること加多麻とは訓ざるべし

又乃無目堅間よりく迄の四句は三言四言五言六言ざまいに侍

又曰くも古ヘ訓ることを代匠記よ、、神代紀加多麻とよまれたるを

をよくおもふに神代紀の無間堅間と乃間ハ堅く密りて尋常ざまに異なるべくハ渾て賞歎（ホメ）ていはゆるなへ〳〵と

小船を籠の編るを云ふ其故ハ小船ハ海底に沈む物なれバ水に浸ざるを云ふ名ありて籠作ることのいとよくも目の入らぬまりてよく目のあらはさしくも語ふ

堅間の用ハく徒ありて沈るものなれバ訓ざるをこのみ詞（ヒキ）をよくと語（ツヅケ）を思へし

加能久君美良和禮都賣杼故爾毛乃多奈布西奈等都麻佐禰賀茂大人云四句籠よりも滿無ハ誤ハ侍し乃字

この下小射等籠荷四間乃間乃四、巻十一、巻に鳥籠之山かく書るハ籠を古ヘい弟證ありて和名抄よ籠竹器也和

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

名古（仁徳紀よ「運」材ヤ「艇」簀トし見ヘ）とありて古ヘ云ヘ本よりは里たる名ゐる又同書よ答箸小籠也漢語抄云加太美とも見えたりこは古今集の哥ゐよ名を加太美も加多麻乃ともよめり多く加太美とはふと同し物ゐもはうい麻乃轉もしる名ふ〻此ゐと當ゐふ也はゐれと上よ云ゐ如くきを思ゐしさ〻加多麻とよまむこと加太美は加多堅間ゐを小籠也と注せるし堅間ゐ名よ〻堅間を轉もしる名ふ〻此ゐと當ゐふ也はゐれと上よ由ゐし堅間ゐ名よ〻堅間を轉もしる名ふ〻此ゐと當ゐふ也はゐれと上よ由ゐし

古事記上巻須勢理毘賣命の御哥よ吾者毋與乃下よ吾戀日八方まで見者悲毛ゐと云る毛を歎息乃音ふ〻異ゐを混ふることなれ與を呼出ゐ辞ゐ里籠を呼出るを次ゐる籠を宣て云出も料

書紀清寧巻大御哥ゐ置目名慕與ゐとあり又

ゐ毛ゐ毛也とも云りかゝ也ゝ也里ゐ二巻に吾者毛也ゝ也里ゐ二巻に吾者毛

ゐ毛ゐ毛也とも云りかゝ也ゝ也里ゐ二巻に吾者毛也ゝ也里ゐ二巻に吾者毛

竹よま礼草ぬと堀取るものを云あむ（万葉考よ今り田舎人の野菜ぬや堀とる事をフグセとしホグシともを云竹また鐵しくし製とありしりを其處は忘礼ぬる名義は略解よ保留久之代約ぬる法しと云り毛與い上に云るの如し○美夫君志持　夫君志の三字上や異ぉ訪も同字を姿書習たる此集代例ぁり次こし皆然るさて此句し美麗母乳よ説ふよ准へて知結し○此岳雨此やを其處をさせり岳は（地名）を云又山の裔（ア）拡尾と云も此や異ぁり處（カ）は高きをみかありかぉやの加ふく此處彼處（コ）の古に（アハセ）かくぉるる言ぁる○菜採須兒　菜は惣て飯や酒とも配

小食ふ物の称ふく魚鳥獣草菜何ふも泥く云貽ふ魚と草菜に專（ネ）と云さよふぬれるは專とぬる物ふも密ふて鳥獣ぬとを常はうる食はねなたの加ふら魚や草菜の名ぉ如くふりてさふ中にも草菜ぉ云かをぜ汎きを魚をも專（ネ）と食（ン）物ふぬりふぬりは俗（ヨ）は普をうちまのせて奈や云を專やある云ふぬり採須は都年の延語にてぬのはより云ふぬり採須はぜこも名れや必はしもの加ら尊語の如くもきら更調ふきりて云ふさと多し十七巻に手等

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

○あやろ自(ミヅカ)の事に心云

賣良我春菜都麻須等七巻よ小田苅為子九巻
に伊渡為子者十巻よ山田守酢兒ねとあり又
書紀神代巻哥ふ阿磨佐箇屢避奈菟謎迺以和多
邏索西渡ねと鄙は女ふいいを古事記下巻此天皇段
三重(ミヘ)婇(ウネ)女の哥よ阿理岐奴能美幣能古賀佐ゝ
賀世流美豆多麻宇岐雨書紀歌明御巻大葉子歌よ
於譜磨故幡比倒甫曜須母をねと心ひし尊語
ふらはふを知倍し児も男女若ねを云称ねふ
ね轉りてを親しむ方ふゝ云をそゝ若さは愛(ウツ)

親(シ)まるゝしものふゝ礼婆ねふ法し又尊(ムネ)とは女
ふ云の多きゝ女は殊に若さゝ愛親しむ故ねゝ
女名を貽(ハナ)子と彫(ホリ)る若き方の称(トナ)ねふ法し男に云るゝ此下よ去
来子等早日本邊ねと多かり○家吉閇吉閇
は万葉考よ告(ノル)制の誤いとゝ法宜しゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ吉閇ねらゝゝゝゝゝゝ

法し又法を能理と云し上よりと云しせよと定
告ふと云聞せ賜ふより出たる告又謂ふとの字
をし能流とよ告ふさと記中
又万葉集とよ数多あり云菜採女の家を告
聞せよふまり告礼を延へ
ず不聴雖謂話礼話礼常
詔仁徳紀大御哥よ難餓
詔許曽十一巻よ君名謂仁
伊弊劇虚曽さは伊波世と
古事記上巻須勢理毘賣命御哥よ和加
都麻母多勢良米とあはし持ちをら免の意ふり
又廣瀬大忌祭祝詞よ御膳持須留若宇加能賣命
能あふをと常はよ云格乃語
ふとをの里て世は菜採須の須よ通ふ延語ふ
ふ又延法を沙根と云り此下よ草乎刈核五
巻よ奈何名能良佐禰ふといと多しされも女
の名ぢ告聞せよふり〇虚見津ハ大和の枕詞
ふ里神武紀よ及至饒速日命乗天磐舩而翔行
太虚也昵是郷而降之故因目之曰虚空見日本
國矣日本はよ大和の借字ふりを見也〇山跡乃國者ハ大和
國半婆ぢ意ふ里をもくく天皇はしし天下ぢ知
しめすふぢ此よ大和國ぢ限りて詔へるを
當國よくのさとをふし婆ふり古事記此天皇段よ
一言主神の處よ

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

雨天皇望令問曰於茲倭國除吾亦無王云々と
あるも萬城山にそのさとおり
○押奈戸手は大(オフシ)並而にそ俗よ一体又惣体也
と云この如し古事記傳廿廿一巻
そ大(ホ)の意もて其證は凡(オフシ)海姓を大海とも書
き凡(オフシ)海姓を大海とも書也熊野忍隅命を熊野
大隅命ともあるを以ても思定ふし凡を捴名の
押(オシ)忍(オシ)みな同し押並而もて押(オシ)並(ナラ)而もて押(オシ)並(ナラ)而もて
あるとあり物よ押(ヌ)と云語のあるも彼(カシ)處(コ)を押
は此處を大(オホ)きをるよもて云り並は縦ふも横ふも

並(ナラ)續(ツヾ)ゆくを云に縦と云は古事記倭建命段の哥
と多くよ見る氣は来経乃約にて集中小氣並而
をいふ縦ふもて又馬並而もて並而乃類ハ巻よ
今朝のあけは雁の初(ハツ)時(トキ)の来経ハ巻よ
浅茅が色付にあはゝ寒く聞し並野辺押並はお
ほ横ふ並(ナラ)字も字書よ皆義をも相扶傍也併也
縦横を兼て大(オホ)並(ナラ)たるをゝ見もて又並(ナラ)は延(ノヒ)ふ
きさも押並をも即押延の意ありもて通ふ
縦横に足りらいかゝるを云に併せて意得へ
し○吾許曽居吾は阿礼とも和礼とも訓法
し古事記中巻明宮段大御哥一首の中小阿賀と
も和賀とものもて通はし用ひ給へり○師告

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

名信手　告字玉乃小琴よ吉の誤とおもはり師吉
は及布また知とも通ふ本一言ありて其故は
まり志久とは萬よ不足さと無く至り及ふをいふ
言あり俗に行届をいふ宮造壽辞よ於底津石根宮
柱太斯理於高天原氷木高斯理と云い高き方
小不足さとおもきに於高天原云ふといふ又堅
固き方に至り足らへるに於底津石根云ふと
云ふ稱辞あるをその太斯理高斯理を太敷高
敷とも云ふ古書ともよ多くありたまき斯理と斯

伎と通へる又祝詞小瓶上高知と云ふ瓶は借
字まて美加とも酒よりも飯よまれ盛る器の名なれも上と
る器の名なれも上と
雙酒も小對分へたるは飯を高く盛あたる状
を稱へしもい事こそ異も氷木高敷と同一意
なる又物識人。と云ふとも物事に及至ふ知
慮あるをいひ雪霜あとの零敷此志久と言
りをい雪あとも千重よ縦横の數あ
よる降積を云ふ縦なる上
なと云ふり廣さるを
乃原各別あるよ非ふ精
くいはい重まく。ッあ

○龍田風神祭
○祝詞小見ゆ
○の所こまく

○縦よまれ横よまれ

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

○さしくふあるよ

○思慮（サトリ）の

る古と（ヨ）又一ッのかさをは於高天原おもはは食おもはは於高天原おもはは於底津石根おと。云り祓上おの祓おらこのくて宜き詞おり又席おとを布と云ひ其地よ廣け満ふよ至云り敷坐国とは国乃果（ハテ）まく知坐をい物（事）を知と云りの届くを説と云りやい似よ其物事よ思ひ至漢籍乃知れ説と云りやい似よ其物事の極に。軽き語よ非るおをこおるをふこと思ふこと彼およをもと思ふこと

○吾已曽座（ヨ）

詔（ヨ）ることいを

は皆由あふ古言お

と（ヨ）ふり未明ら多ら

きはもを

敷座まお敷座国おと云。即此（コ）の師吉ひ同し名倍手れたとは上小

云る如く敷並い知並おり

はを古事記傳祝詞考万葉考お

と（ヨ）ふり未明ら多ら

座は麻世と訓へし伊麻世とも訓けれしと上

よ居（コ）とあふ調よ従（ヨ）れはおりはて天皇いしも

神おら尊く坐を故よかく御躬おら尊み

詔へり書紀此天皇乃大御哥お野磨等能鳴武

羅能陀該儞之符須等把例柯挙能居登飫褒

磨陛儞麻鳴須飫哀杞瀰賦賦憾鳴杞舸斯顕把

磨之杞能何娯羅儞陀之伺施都麗杞能何呉羅

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

倭陀ゝ伺云ゝ古事記同大御哥より阿具良韋
能加微能美氐母知比久許等雨云ゝ此集六巻
聖武天皇大御哥尓食國遠乃御朝庭雨汝等之
如是退去者平久吾者将遊手抱而我者将御座
天皇朕宇頭乃御手以撫撫曽禰宣賜打撫曽称
宜賜云ゝ如と例の事ありけり押奈戸手よ里四
句はたゝ同しほとゝ事なり文よ詔玉ふり〇我許
者者宇玉乃小琴に曽の誤なり和乎許曽我乎
社ゐと訓ふしとありゝ、、、、三小吾祭

神者不有四尓親吾者不念ゐとあれ婆宣ゝ乎
と云辞なり訓付へし〇背歯告目歯の辶は助
辞尓て支と思ひて告法しゐ里はあら文〇家
乎毛名雄毛古女より男尓名告をはこと
は支とをゝ尓時のゐはゐ里けりと見ゐ三よ美
沙居石轉雨生名乗藻乃名者告志豆余親者知
友九よ難波方塩干雨出而玉藻苅海未通女等
汝名告左禰和歌朝入為流人跡乎見座草枕客
去人雨妻者不敷流の下流は海よ誤この阿麻とあるへ

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

き哥(ウタ)なり敷(シキ)は十一ノ敷乃誤なるし小早人名負(オヒ)夜音灼然(シルク)吾(キミノ)名謂嬬特吾(ワカ)は君の誤葛木之其津彦真弓荒木雨毛憑也君之吾之名告兼(ケム)吾之(ワカ)は君とさを吋(ムカフ)の吾之(ワカ)なり之鹽津乎射而水乎舩之名者謂乎師乎不相将有八方十二小任吉之敷津之浦乃名告藻之名于名告藻之名者告乎師乎如何相難寸(キカ)なりと皆名を告(ノル)は逢むと許諾(ウケヒ)をさに云り此(コヽ)もさる者告而之乎不相毛悋足千根乃母之百名乎雖白路行人乎誰跡知而可然海部之礒雨苅

意の御哥なり○一首(ヒトヨ)の意は籠と布久思を持此なる岡よ菜採む兒よ我小名(ナ)告(ノリ)きこのせよ此國をは押(オシ)なべて我領(シラ)るかしを即我(ワレ)をこそ吏(セ)と思ひて名(ナ)告(ノリ)顕いませとなりさて、、言外に此女(カ)の姿容(カホ)美(ヨ)さを見愛たまふよし見い

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

○高市崗本宮御宇天皇代　息長足日廣額天皇
舒明天皇ぉり
天皇登香具山望國之時御製歌
香具山は大和國十市郡ふあり伊豫國風土
記云伊豫郡自郡家以東北在天山所名天山
由有倭在天加具山自天天降時二分而以片
端者天降於倭國以先端者天降於此土因謂
天山本也此山の事くわしく見ゆ名義加具は
国人小問ほし
蔭るを活ー然云をーは天上ふを加具山と

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

云ありて古書とも
亘もよ一山ぞは聞え
え、たゞ其一をいは
に是以八百萬神於天安之河原神集集而高
御産巣日神之子思金神令思而集常世長鳴
鳥令鳴而取天安河之河上之天堅石取天金
山書紀ふは天香山ぞあり之鐵而求鍛人天津麻羅而科
伊斯許理度賣命令作鏡云〻内抜天香山之
眞男鹿之肩抜而取天香山之天波〻迦而令

占合麻迦那波而天香山之五百津眞賢木矣
根許士爾許士而云〻天宇受賣命手次繫天
香山之天之日影而為鬘天之眞拆而手草結
天香山之小竹葉而云〻ぞ見えあり香山は
一處乃名とも聞えず加具八蔭と通ふ言ふ
て何處よ多山を稱へたる号かるゐし蔭と
は枝葉の茂く隠りこのゐるを云り同記中巻玉
垣宮段よ縵(カゲ)八縵(カゲ)と所ゐるは橘の枝葉おから
まゐをいひ此集七巻ふ片崗之此向峯椎

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

蒔者今年夏之陰雨将比疑とて免ふを夏ふ
ふりく茂く大小枝らむかを云歟ふり然も
は蔭山をを茂く蔭ある山をを云意の称号歟
ふは一下歟ふ藤原宮御井歌小日本乃青香
具山者日経乃大御門爾春山跡之美佐備立
有畝火乃此美豆山者日緯能大御門爾弥豆
山跡山佐備伊座耳高之高は為の誤歟ふし青菅山
者背友乃大御門爾宣名倍神佐備立有とよ
免ふ青香具山 歟ふ 青菅山をを対へれを青蔭山ふ意
よりくけるる歟然見をは味深しふは御井
の哥歟ふ四方の山くを云るをいかふとと
云ふ水はそはくふ木ふりける地ふ出れ婆に
て末を常ふ有禾御井之清水と結たり如是
れは掬山青菅山ふをを云ふは専を井ふの、
ふ詞ふく蔭をを云ふをいと由りて聞ふ。又
加具山と云は天上神ふ由りる事ふを非る
ふし上に引る古書記石屋戸段傳八巻卅葉
伊那那美神の神避坐処ふ金山毘古

十九

。類聚三代格弘仁十二年四月
。廿日太政官符ふ浸潤之本ハ
水木相生然則水邊山林必須
鬱茂何者大河之源其山鬱
然小川之流其岳童禿必矣知
流之細大隨山而生夫山出雲
雨河潤九里山童毛盡絶泉
乾云ふ歟をを見えくあり

金山毘賣波迩夜須毘賣古波迩夜須毘賣あり
て次かの大和の香山は事見ゆ然るに彼
香山に埴安てふ地名あり此小金山の名あ
て彼此を合せ思ふに本おの山の名を彼迦
具土神か由ありにや猶熟考はしをかりこ
は実に云れたるこの如しされを天上ある香
山を一處ならはへけを迦具土神を田
山々一處ならはへけを迦具土神を田
ありく聞ゆるはおのらたのしく合へる
なるのなりの故事ぬ見えた
ましさく古書ともよ天上の故事ぬ見えた
る山をいへは天香山河をいふは天安之河
書紀小天八十河古語拾遺ふ天ノ川ふと
も見ゆ皆同しかるはしふはし
とおみかりそ一も他名の見えぬも一處ぬ
らさる證あり天高市真名井ぬも然か
はし書紀小堀天真名井三

處ともあきはあり然れは香山を蔭山ふ名安之河は
弥瀬之河なるへし此国の香山は一處ぬ
思ひそ天上ふをも然りそ
さらは此國ふても加具山一處ふ限
るましきおとぬも天降りし山故小彼天
上ぬる名を負せ傳はしふ伊豫のは国も
異なるのらたく天山と云傳へしぬるへし
二小天降付天之芳来山云、七に昔者之事
波不知乎我見而毛久成奴天之香具山そ
外も多のり又此下ぬる天智天皇ぬ大御哥

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

小香山畝火耳梨三山妻爭乃故事ともをみ
ろ一三小天降就神乃香山ともありて神を
座も山ある説後紀小延暦廿四年十二月丁巳、
等山百姓任意伐損、勅大和国吏寛容不加禁断自今以
後莫令更然ま爪三代実録小貞觀八年七月
二日發遣高山祭使従四位下行大学頭潔世
王外従五位下行音博士清内宿祢雄行等か
重せらるしおき香山寺をば云ひてく寺と
見ゆさて古く続紀天平勝宝元年閏五月
是も実しき山なほ昔ゆ時ゆ寺をも僧の我山ゆは
ゆさりけ今はおとろの外ゆ浅たまひふり
むかしやその歎かはしさ
山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰立國見ゆ

為者國原波煙立籠海原波加萬目立多都何怜國曽
晴島八間跡能國者

山常庭は大和爾者ありり常を登の假名ゆ用ふ
ほを此字の訓を假名はおを此字ぬ常よ登許
とのみを免やも精ちくいはくそ乃登許八止
處ろり止は惣く定ろりく不遷を云り止留ぬ
と此麻流を辞小て體は登の一言ぬを。辞小用
ろ名登も此をしぬ孔蚤詞此結をれ下ゆ及は
て止ろはも即ちこの里又家處宿於釜處竈なぬ
りぬ

○書紀釋ゆ引ろ南弘化私記
○序をも古語謂居住為止とあり

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

ともゝゝゝゝゝゝ其とき海と定万
りて不遷を云り又門も家の固(カタメ)なれは盥(ユアミ)入来
もの拭止むは構(カマヘ)て古事記ホ千引磐を称(タヽ)テ
る事も十三(ソヒ)日(ニチ)摂(カケユテトモ)友久経流三諸之山磯津宮
見(ミ)て塞坐黄泉門大神と云
地又仁徳紀孝徳紀ゟ車駕還(トツミヤニ)官清寧紀ホ天皇
崩二于宮(トツミヤニ)ゟと訓りこゝゟ外宮(トツミヤ)の義ホ非るおと
おなしから明らかなし然れゟ常(トコ)ハ止処(トコロ)ゟ
又彼床も通ひて一言(コト)ゟり
那神牀(トコ)舩床筏之床の類も其物の処ゟ定万り

在(ヨ)を云夜床(ヨトコ)も通霄(ヒトヨ)ゟゝ万ゟ処ゟり然ゟゟを登
の一言(コト)ホ常ゟ孔義(コヽロ)ゟる故ゟ此字を登と訓く
六巻神亀元年辛(カノト)テ紀伊国時哥ホ和朝大王之
常(トコ)宮等仕奉流左日鹿野由云ゝ二十ゟ東(トツ)常(トコ)宮
ゟゝあゟゟ外宮ゟるゟを常ゟ
字ゟ借(カリ)てそれ(ソレ)ゟう(ウ)へハ舩(フナ)ゟる
り○村山有等ハ群山雖有(アレトモ)ゟり等字を濁音ゟ
用(モチヰ)ゟる剣集中ホ多し○取(ト)ヲ呂布(ロフ)取ハ軽く
添(ソヘ)ハ言(コト)ハ如聞(キヽ)も免(マヌカ)れ(レ)ゟ精(クワ)くいはゝ義(コヽロ)あり
てたゝ乎呂布ゟ云とゟ異ゟりまゝ取とハ手
ホ取を本ホて萬ホ乎(ヲ)しくものゟる事(コト)を取云

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

こゝを云り取装取飾なとの如し取与呂布も与
しく取よ汲ふの如き形容(サマ)を云詞(コト)にて万葉考
云宜てゝ言を物の足り備はれるを云与呂豆
与呂比(ヨロヒ)も此よりて別(コト)を考(カムガ)へ言なり取与呂
布天乃香具山といるも此山ゝよ汲(クミ)つゝの
も足たるを云るなりまた宜奈倍吾背乃君(キミ)とも
云るも同しくいのりて鎧(ヨロヒ)と云物も體(ミ)の限(カギリ)そいれ
へるをしの号(ナ)俗(ヨ)小具足(コヨロヒ)云り齊明紀ホ弓矢二具(フタヨロヒ)
源氏物語抔とゟ御摺一(スリヒト)よ汲(クミ)ゝとゝいるも一具
を云るにて意得へし○天乃香具山　天は阿
米と訓(ヨミ)し古事記(中巻)倭建命(ヤマトタケノミコト)ゝ御哥(ミウタ)小阿米能
迦具夜麻(カグヤマ)をあてゝは阿麻(アマ)をそ云るおと(阿麻は古よ聞え)
煩留(ホル)ハ長(タケ)とも通(カヨ)ひ言にて高(タカ)小進(ススム)を云り阿賀留(アカル)
ハ少(スコシ)別(コト)ゝ立(タツ)ハ既(スデ)ホ騰(アカ)り竟(ハテ)て立(タチ)抔(ナド)出立(イデタチ)なとの
立(タツ)ふゝ非(アラ)ゝ
総體紀哥(ウタ)ホ美母盧我紆倍儛能朋梨陀致倭我
彌細磨云ゝ○國見(クニミ)ゝは高き地(トコロ)
ゝ登(ノボ)ゝ国内(クヌチ)と望(ミサケ)放(サケ)ゝ、、、、、を云り神武
紀ホ皇輿巡幸因登腋上嗛間丘而廻望國狀曰

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

妍哉乎国之襃矣云々と見えたるを始ゑく御
世々々ゑ見えたり又国守ゑとも其部内にて
国見せしゑと三ゑたゝ九の巻ゑとに見ゑ諸国
ゑ国見山国見丘ゑと云地ゑ何ゑるは其跡ゑ
るはし○国原波 原ハ遠。廣く平ゑる地を云
り天原海原河原野原葦原ゑその如く人乃腹も同く
又祝詞小鹿腹滿雙色ゑ云ゑは此器れ
ふくらみそほ形ゑの腹ゑあるゑは似たれ婆ゑり。国原と
は山ゑとも無くて、純国を云はき地ゑ○煙
立籠 籠字を龍そ誤ゑ本ゑは誤ゑる国内の家

○又安はら法師原ゑ歌を云ふ言も其意ゑの廣さを云り

○之一言にく 平庸ゑくも

群けゑる立籠く富饒たはにまゑるはる状籠
そ云一語にて思はむゑは御詞用かこけれ
ゑいと免く多し古事記高津宮段に於是天皇
登高山見四方之國詔之於國中烟不發國皆貧
窮云々後見國中於國滿烟故爲人民富云々五
巻貧窮問答歌ゑ可麻度桑播火氣布伎多立受
許之伎爾波久母能須可伎立飯炊事毛和須禮
提云々源氏物語蓬生巻ゑ常陸宮ゑれ荒、けふ
り絶く哀ゑいみしきゑ事多かりゑるを見ゑ○海

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

原波　海原は香具山の麓なる埴安池なり此
池古はいと廣かりしと見えし万葉考ゐ見ゆさて
こは池れ廣のるを海ゐ見做して詔ふるに非
ゑ宇美ハ大水と云こと
云よしを凡く廣きを云ときを於布と云く於
保とは云ることゐ非しおきれのおのうら別ある
こゃく知らまく河内国を大河内国を云ゑ大
は河ふにくげる言ゐ非ゑ国よりゐ大にて
淀河の内ゐる国原を云い
り河り大るよしあらはたく
ゃ云にし集中に三吉野の大川とを免る哥は
多のれ珍於布志とは一も云るおと非し又凡
へテ於ゃ汎き義ゐ用たり又押並而の押も於

○又仁徳紀小全覧ゃこのゐも
大の意に非ゑ

○詠不盡山歌ゐ石花海跡
名付而有モ復山之堤有海昔於

布志るよし上の十一葉ゐ云り又鮪と云名
も大尾乃約まてゑ尾れ廣よゑ号者たるおを
鰭之廣物鰭之狭物ゃおきらを思ゑくも知へし。されは
こゃを知海ハ更るり池沼ゐもの廣く湛へ
たる水を云号ゐ湖水を淡宇美又水宇美ゃ
云も同し海を其中ゐ殊れく大水るかられ
の況のら名とるものゑたく河の流るゝ
水ゐく類異ゐる故ゐ宇美ゃハ云ることゐし
三に猟路池ゐく皇者神爾之座者真木之立荒
山中爾海成可聞とよ免るゑ愛ゃ同しく宇美

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

は大水の意にて海に関る哥には非ず海を書
我を皆借字なるをさて宇奈波良を宇美乃波良
を省ける語(ゴ)なり宇は非ず但し海の潮(シホ)をもいふ宇美
やまほ宇美志保乃義にもあらむ崇神紀に開(ヒラケ)
ぬと思(オモ)へらむ池溝(ウナテ)なる彼紀にもほしやうの
ふ同しこれらをいふと思ひ明らむはさおとそ
然ほを昔(ムカシ)よりの注等(トモ)みな海をいふおと云惑(マド)
へる詳(サダ)かに説(トク)る物なく果は難波海を云そおや甚(イト)
しき強説(シヒゴト)さへ出来ぬをるを皆其本の暗けれ

婆(バ)をけり○加萬目立多都　加萬目は鴨(カモ)群(ムレ)
の約にて鴨の多く群たるをいふ三ぬ天降付
天之芳来山霞立春爾至婆松風爾池浪立而櫻
花木晩茂爾奥邊波鴨(カモ)妻喚(ヨバ)邊津方爾味村左和
伎云くかく鴨妻と味村を對(タイ)へ云ほぬて知へ
し鴨妻ハ鴨群味村を味群(味は此鳥の名)ぬ婆(バ)をり
然るを諸注ぬ加萬目を鴨をや云るは甚(イト)非(カラ)
き非(カラ)かり右の三巻をるハ全く此哥とむを以
埴安池とを先ほに鴨妻と味村を對はせ反歌

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

糸人不榜有雲知之潛爲謇與高部共船上住也
く免るも味謇高部みれ及於鴨を同く類於孔を鴨
と除く鷗を云へきに非ず況く鴨こそ池にを
相應く聞ゆれ立多都は鴨群の多く飛立於り
凡て同言と重ぬほを事と甚く云ときのそ
殊於るとは無けれを地勢れ盛き多狀を限於
く詔ひ顯したる御詞用いはく中く於るをし

○好美
ムろいる沼夫婦遇合ところ麻
見、波比を甘美咋合於り又

さてこは上の煙立籠に對はせ給ふは一句に
く此一首れ両眼於孔嫁上尓説ることを考合
見く熟らふ味はふしし上代の哥れめてをき
はぬく言少尓得もいはぬ味を含免り後世ま
さ尓ゝらむやは○何怜国曽　宇麻斯やを
凡く情に。ことの言尓も云難き味於多を云り
食物を旨ゝ云熟睡を宇麻伊と云ると是於て
味織之稜と續くる語も巧尓織於せる文の詞
も及はぬを云古事記海神宮段に味御路可怜

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

小汀（ヲハ）と云るは水中於る御路小汀尓て奇異しけれは詞も及はぬ義（ヨシ）なれ（ナ）号（ナ）なるへし又神名人名尓も宇麻志（ウマシ）や云（ヒ）又貴（タフ）人（ヒト）尊（ミコト）や云（ヒ）も大（オホ）く稱へ申（マヲ）す於り何怜（サ）字も然（サ）る意（イミ）にて書り此字を阿波礼又於毛志呂（ヒ）も用（モチヰ）る字（モジ）なれ（ナ）ど取（トリ）て書（カケ）る古事記尓大倭帯（タラシ）日子國押人命坐葛城室之秋津嶋宮治天下也と見（ミエ）元書紀尓も此御巻（ミマキ）は二年冬十月遷都於室地是謂秋津嶋宮や有（アリ）てや此孝安天皇の都（ミヤコ）ゝ地名於り彼神武天皇乃猶如蜻蛉之臀呫（トナメ）や詔（ノリ）へりしは即此地のことなりて彼大詔よ（ヨ）り起（オコ）れる名於（ヲ）て腋上も嗛間丘も室（ムロ）も皆相近き處にて大和国葛上郡（カムツケノコホリ）なりさて孝安天皇の百余（モヽアマリ）年久しく數座（マシ）し京（ミヤコ）師（シ）ゝ名於る尓ら秋津嶋倭（ヤマト）やいくつけて云（イヒ）ならむその倭（ヤマト）も引（ヒキ）てく遂尓天下乃大名尓多於（オ）れ（レ）ることは師木嶋（シキシマ）や全（モハラ）同し例（タメシ）なる（ル）ゆ（ユヘ）り此（コヽ）ハ大和尓於（オ）く枕詞の如（ゴト）し（シ）〇此例（タメシ）にね多（オ）し〇八間跡能國者大和

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

国ハ何怜国ぞやうち返して意得ぬし○一首
の意を大和国は山多きを取宣ふる香具山
尓登り幸して国見もせをもろ〳〵女陸処ハ煙り籠
免て富饒たり水処は鳥等ぞたはく飛立く地勢
も盛に見ゆ大和は可美き国ぞほめをぞ
○

○天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻御歌
内野ハ大和國有智郡尓あり冠辞考たゞき
名抄同郡阿陀卿あるを此野なりとの条云和
云るを上古は郡名ばかりにて宇智と
野と云しを小て近江国蒲生郡の野を
蒲生野と云類ぞはらし野雁云阿太。神名帳
有智神社諸陵式有智陵皇后井上ぞとを同
郡なり又味師内宿禰建内宿禰兄弟の居住
ぞ地も同郡尓そ名の内も地名を負けむよ
し古事記傳廿二巻十五葉尓見ゆ文武紀即位三年
二月丙申車駕幸宇智野慶雲三年二月丁酉

○乃大野此集十巻に見えたり

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

車駕幸内野而見元明紀亦立宝皇女爲皇后當代の皇女ゝり舒明紀亦立宝皇女爲皇后后生二男一女一曰葛城皇子近江大津宮二御宇天皇二曰間人皇女三曰大海皇子淨御原宮ゝ御宇天皇ゝ見元て三柱坐ゝ中の皇女なる故ゝ中皇ゝと申せりさて後ゝ孝徳天皇の皇后にありましゝ多る故亦此ゝ命ゝ而りゝ皇后皇太子ゝ命ゝ間人連老ハ孝徳記白雉五年二月の条小見えゝ詳ゝ傳ゝる傳はおけゝゝ此皇女ゝ又乃御名間人皇女ゝ多称ゝ亦ゝらは御乳母方の人ゝ名ゝ負ゝらはゝ古例ゝりゝ乳母の姓ゝ御名亦負ゝ八隅知之我大王乃朝庭取撫賜夕庭伊縁立之御執乃梓弓之奈加弭乃音為奈利新朝獵爾今立須良思暮獵爾今他田渚良之御執梓能弓之奈加弭乃音為奈里

八隅知之我大王乃　此詔ハ冠辞考古事記傳十一巻ゝ詳ゝ見ゆ二書ゝ考合ゝ知ゝし今此亦約ゝ見ゝ為我天皇亦て安

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

○続紀十五巻二歌ども之後漏美
○斯当和ニ於保友美ども訶
伽は安見知にく知ら
食の知ら同ー八隅知の
美我にハ非ス
語ることなれ

見(ミ)は天下を安く知しめをわり見(ミ)は食(メシ)と通ふ
古言にく聞食知食の食ら同ー然れは安見(ミ)を
安食(メシ)なり。我大王(オホキミ)は我(ワ)子(コ)を親みく云語(コト)ら我兄(セ)
我子(コ)をの如し意當伎美(アタキミ)を天皇(スメラ)より皇子(ミコ)
諸王ら至る万俗總く皇(ミコ)純(ト)を申(マヲ)す語(コト)をもちて
安見ハ天下を知し免(マ)すことを称(タヽ)るを凡(タヽ)の皇子
等(ラ)ら申(マヲ)すをは集中に當らさるに似たれ(ト)共
見(ミ)由
日神の御末(スヱ)にく同ー大家(オホヤケ)ら座せ婆然申(マヲ)すよ
何事のあらむ○朝庭(ミカド)は朝爾者(アシタ)も朝(アシタ)は明時(アケ)方

るりと本居大平云りき又荒木田神主久老云世
ら往ー移来ーる森ー移なるやと云語(コト)を土佐國(トサ)移
とにてら往もの多来もの多森もだと云やいはを
雅言ゆくさくら移やも此もの約言移
ら明(アケ)ー方(カタ)ー是を約免(マ)すことを通ふ例(ト)はたもとき
あさともよりもそもの如ー
ほるもき移との如ー
十四まとほしやふもれ
もあはの一もさもなこそよさも同巻よ猶

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

ありすよ、むなくるもうひれさのをこえ
志さにとゐるも越しなる已上信と云る濃漫録
尓而此語(コト)いを、明らけし又肥前国風土記の
哥尓も志努波羅能意登比賣能古袁佐比登田
母為祢豆尓志太夜伊幣尓久太佐尓篠原之弟
真一夜母率寝而尓姫之子等
時哉家爾将下(クダ)尓をや見えあり○取撫賜
撫々等閇(ナデ)尓ら次持愛(ウツクシミ)たる
布辨ハ夕方へ俗言尓ゆふかたやと云りにてもしるくゆゑられ
と云り○伊縁立之 伊ハ凡て上ふ冠らしむ

るも下尓添るも事と強むる詞なるを然るをた
た尓發語助辞やのみ見るは精しからず必主(ラン)
とのはおと尓れみ云こやを集中古事記書紀
との寂(イフ)古き哥等尓ら知へし又加黒き髪加青
加真備(ツサ)真中尓(ヲ)と乃麻左(サ)土(ヲ)尓ほ玉藻なとの
やれ左多助(ヲシ)多町(ヲチ)尓(ヲ)やの多も同し愛(メ)のは縁(ヨセ)と
云こやを強むる伊ふりさるハ上れ取撫尓對
むら大御身の側ちら更(サラ)に立(タチ)たるふよしなるを
立(タチ)之ハ立而之尓るを而字を省るは二巻に定(サダメテ)
之水穂之国千尓やの如し二ふ去年見而之三

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

小殖而師故ニかとあり〻而ハおはらく落居
る辞乃たゝは過去ニ辞ゐり○御執乃弓を
御執と云は叙と御佩(分ニ)衣を御服(乎)を云尓同し古
は武事(メテキワサ)と重(ふ)ねとせらをしこのは天皇も弓矢を離
さゝせ賜は文日(見ニ)夜(足ニ)大御身尓近ゐ侍て千馴し賜
ひしこを上の四句にて知たし○梓弓之梓
は和名抄尓孫愐切韻云梓木名楸之属也和名
阿豆佐と訓り其木桐尓似て葉も似奴るを云
り梓弓は此木を以て作るゆく作るゆく作るゆく

りこは弓弭の響(オト)にて天皇よと察り奉(マツ)らるなりさるは天皇れ御料(モノ)は弓矢も殊に勝ぐれて有けむ○朝獵雨ハ下ル云ハし○今立須良思立は獵ル立給ふなりに出立たまふ良思は察り決る辞にて良牟とは同しくらん丈言ル云ラシイと云ヒラシイは良思ひ伎は古言にて二の十四葉ル出又良牟もた、ル察るのみれ辞にて今言に云ヘデアラウと云リアラウは阿良牟乃音便なり今を立たりあるハさの意なり○暮獵爾朝獵暮獵は詞の文(アヤ)のみ尓て別(コト)意をあらさる

ハし朝宮夕宮朝庭夕庭はれ類ほの尓も多けれ然なり○御執此(コヽ)小乃字を省るを上と照し訓(ヨミ)法(サヘ)と知らしむる意もらひなりさて此より末句丁てい全く上と同し言を折返して一首の意を深免そるものを尓しく古哥尓多かり○梓能弓之此(コ)尓能字を加(ク)たるも上の如し○一首の意を御父天皇はしまし、御執乃鳴弭の響(オト)とそ聞奉(マツ)るい今を御獵尓立賜らしを察り奉るとなり

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

反歌

こは反切の義ぉを長歌の意を反切免ゐる
ぞし弘目ヶ那ぬ

玉刻春内乃大野雨馬数而朝布麻須等六真草深野

玉刻春は久老神主の説ぇ玉は借字にて程の
義ぉを十八巻放逸鷹歌小知加久安良婆伊麻
布都可太末未ゃ書る未は誤ゐり等保久安良婆奈奴可乃
宇知波須疑采也毋ゃあゐる太末ゃ程ゃ云おゃ
ゐり然れ婆玉刻春は程未經麁玉は新程玉坂
は程避源氏物語末摘花巻ぬた見ゆ避は程経て
稀ゐる試云言玉由良ゑ程経ゐこゃゝ聞ゆれ
と由良は未思ゐ得ぬ野雁云由良は緩ゐり古事記麁栗宮段大御哥小意富岐美能許ゝ呂袁由良美ゃありさて程緩ゐ間は程經ること赤て緩ゐるをしゐゃ
野千王ハ東語に寐るを奴麻流といふ婆奴婆
は奴麻ゐゑ玉は程ぇ赤て寐ゐ程の夜ゃ毛夢と
も月ともはゝく枕詞ゐり又夜ゃ闇ゐ意よゃ
黒ゃ毛玉ゃゝく妹ゃ玉ゃゝくゐゃ寝乃一言ぇか

可五

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

かもり又黒馬の来る夜を除くけるを黒馬に
かゝれるに非ず夜を除くけるに係るなり已上攷落と
あり此説尓從へり大神宮儀式帳小玉岐波流
礒宮ゝある毛年月日時の来経急尓かゝもる
身現世ゝと云て人の此世に生くる程を云
ゝ故命とも世とも訓くけ内限なと云ゝ現世
の限とにたく意ゝり○内乃大野爾大野ハ
たゝ大なる野と云ことなるら意ゝりて用ひ
たゝ乃ゝ其田ゝ未ゝ見ゆ二小卓陀乃大野又
越乃大野七に春乃大野ゝもあり○馬数而
数字ゝ義ゝ得て書り集中馬副而馬並而馬雙
而馬毛而ゝあゝて並らにてゝり○朝布麻
須等六ハ此時朝なりけれ鳥の多からむこ
とゝ含先り二小鳥目物朝立伊麻之氐九尓朝
鳥之朝立爲管十三ゝ群鳥之朝立往者ゝとの
りて鳥ゝ朝立ものゝ形ゝ姿ゝ踏ハ六尓朝猟
爾十六履起之夕将爾十里蹋立とある如く猟

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

尓関る詞なり然(サ)も婆朝と云詞や宣(タ)ふの此
一首の眼目を等閑尓勿見過(ミスゴ)して○其草深野
其(ソ)は二句乃内乃大野とさを詞(コト)ばり草深
野ハ此も鳥の多(オホ)らむおや詞含(コモ)先(マヅ)草深さ
處尓鳥を籠れはなり六小御獵曽立為春之茂
野尓この茂野も同し○一首の意を天皇(スメラミコト)ハ御
馬を並(ナラ)へ〳〵宇智(ウチ)の大野の草深野を朝獵(アサカリ)志(シ)〳〵
まゐらむよ鳥等(ドモ)いおや多く獲た万あらむ己
は女(メ)尓しあれ婆御供(ミトモ)にはえまゐらぬおや

よとなりて此御哥尓大野や云(ト)馬数而と云(ト)
朝踏や云(ト)草深野と宣(タ)へるを悉(ツヒ)御獲物(ミカリモノ)も多か
らむこを斟察(オシハカ)りまをし給(タマ)ふる巧なる詞顕露(アラハ)
なら文かを先(マヅ)宣(タ)ふほと先て面白申さむ
方をねさかく御身(ミ)尓のらの美(ウル)しさとをも
は俗含(コモ)万七給(タマ)へりおもむ御情(コヽロ)ふのほ詞思(オモ)ほ
し此御哥得給(エタマ)ふる天皇(スメラミコト)ハ大御心尓は然(サ)こそ
愛(ウル)たく思ほしたをけ先と千年の後(ノチ)の冷尓偲(シヌ)ひ奉(マツ)
るなり凡て此皇女命の御哥ハ悉(ツヒ)のくさ万の

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

底巧拙も有べき万次くに説へし

幸讃岐國安益郡之時軍王見山作歌

舒明紀ニ十一年冬十二月己巳朔壬午天皇伊豫温湯宮十二年夏四月丁卯朔壬午天皇至自伊豫と見えて別ニ讃岐へ行幸は無れ婆伊豫の路(ヂ)並ニ讃岐へも幸しゝにや然る例も多ければ軍王見山の四字は決(ウツ)く誤也見山さるは此歌ニ山を云(意の詞)いへるのみ山風ニ催ほされ家を偲ふとさへあれば軍王もまたほかの或人軍王ハ田邑王きけ万の名ある也ハ訓へりと云り

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35

ガラス使用

そは神功紀に三軍みな見えて花の義
なるをは愛らの説ぬ考へ
なるをも然る人も見出
又おは熟く考はそこと
霞立長春日乃晩家流和豆肝之良受村肝乃心乎痛
奴要子鳥ト歎居者珠手次懸乃宣久遠神吾大王乃
行幸能山越風乃獨座吾衣手爾朝夕爾還比奴禮婆
大夫登念有我毛草枕客爾之有者思遣鶴寸乎白土
細ノ能浦之海處女等之燒塩乃念曽所焼吾下情

霞立　霞は和名抄に唐韻云霞赤氣雲也和名
加須美とあり古事記傳廿四巻廿四葉云加須美とは云
名は赤深の義なり霞みそめ天は朝夕日ぬ
かをむて赤きもの故に云るなるへし
赤くはあらぬ物なれとをお朝夕の日光に映ふくそ
とおもふを以て云名なるなるへし霞字は當たるも
其意なり字書に東方赤也と注せり
春日のさるを見せあり後れ拾遺集戀一
戀ひく多今日は暮しぬ霞あ明日の春日と
いかてくらさむとよめる亦同し又六に露霜
乃秋去来者とよめる露霜乃ごとくなるは霞乃
情具なりに似たりはるに寒き
〇長春日乃八異形ること多し〇晩家流

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

晩(ク)ハ闇黒(クラ)ニト通ひて本一言ニ取り又齊明
紀ニ大御哥ニしろもそれ尓闇(ヤミ)ニ云に同し意ニ取
とあるも同く意かをへり○和豆肝之良受
和豆伎ハ分(ワキ)着ニ取ふ詞にて着の着に同し長日
の晩ぬるとも云分別も不知ニ取るも十一尓月之有
者明覧別裳不知而十二尓出日之入別不知云
ニ取もありさて此和豆伎も云語他(コトカ)ニ取ふは見而
たらぬを猶よく考へし○村肝乃い心の枕詞
ニ取り此説(コヽ)古事記傳卅六之卷尓詳(アキラカ)なるを此(コヽ)ニ取ふも
葉

約(ク)もて云へし村肝ハ群肝尓て腹内(ハラノウチ)のいはゆ
る五臓六腑と云物を群り割りたるをしれ言ニ取り
然れ取毎人の腹内ニ取とてあるを屠て見るものにあ
らぬを古事記高津宮段大御歌尓意富韋古賀
波良通阿流岐毛牟加布許許(ココ)呂袁陀通迦云へ
とのをて猪かををは屠て見ることのあるを
り云初たる語(コト)ニ取りさてこゝ心尓取へそるは凝(コリ)
る心や云名も凝へ約るよしは海菜の
心太を式和名抄ニ取をも凝海菜(コリミルナ)とありて凝(コリ)

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

る物の名又神代紀ま田心姫(タゴリ)とあるを以知
へし野雁云伎もは久矣と通ひとなり○心子
て群(ムレ)をさほ(サホ)しめの名なり
痛癒(イエ)の美ハ其形容(カタチ)を云言なり故(カレ)痛さ、
、、、ふや意得ゑ聞も惣ゑ山高み月清み
凡を痛み浪を畏みの類孑も一ハ有も無も同
しさて伊多ハ善事にも悪事にも惣ゑ有へき
尓過ゑ甚しきを云り物語書ゑに物の為さ
と云ることあり又めて方なとはたゑいそし
てさしも愛痛(カナシ)かをゑ
志き支ゑとの過さるまをはけしくも思はも更に

慨(ウレ)ハしき事悲しき事ゑ
主(ミヲ)を愁の方に云にゑ心子痛ゑ云ゑ愁とは聞
回る扨り○奴要子鳥ハ裏(ウラ)歎(ナゲ)の枕語なり奴要
ハ和名抄小唐韻云鷓鴣鳥也漢語抄云沼江と
あり其鳥ハ未詳(サダカ)ならず文二尓綾爾憐宿兄鳥之
片寐嬬立小奴延鳥乃能杼与比居爾十尓久方
之天漢原丹奴延鳥之裏歎座津乏諸手丹吉
哉雖不直奴延鳥浦噴居告子鴨十七ま奴要鳥
能宇良奈氣之都追思多寐爾放毛比宇良夫礼

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

古事記八千矛神御哥ニ阿遠夜麻邇奴延波那
伎佐怒都登理岐藝斯波登與牟爾波都登理迦
祁婆那久登ある喉（ノド）呼裏歎（ウラナケ）ハ彼の声の高く
さやぎら更（シキ）隠鳴をゝ同記遠飛鳥宮
段の哥ニ波佐能夜麻能波斗能斯多那岐爾那
久ゝある哥同しけれかきは声をいふ物も
也鳩なゝの如く隠鳴をる鳥なるへし名（ナ）義も
同記沼（ヌ）貴（ナ）哥ニ怒延久佐能貴邇志阿禮婆と
見えゝ那田流那夜牟志那延宇良夫禮なゝも

い万葉鳴声より負るニ奴要子鳥ハ奴要声
鳥なるへし喚子鳥も喚声鳥にて同例ニそあ
集ふ（ツド）科（シナ）かもはなり呼子笛をゝ物も人を呼
子の義ニはあらし又
歌よゝ孔婆山鳥ニてゝ又右ニ引ル古事記の御
ゝく人ニ問定（サダ）し冠辞考ニ云まそるものは
猿楽の笛れひしきをゝ当（アタ）らし其故は高く鳴をゝ
きゝ古哥ニ喉呼裏歎（ウラナケ）とゝ音ゝ似多りをゝあるかも
れゝ〇ト歎居者トは裏ニもかゝはねはは
り〇ト歎（ナケ）は裏の借字かゝ歎は字の
如しさてゝは従（ニトモ）駕のたひかる故ニ家を偲ふ
情（コヽロ）を顕し難（カネ）くかゝ〇珠ニ次（ヤヽ）は借字かり天武
紀ニ次此云須岐

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

をありて次を云古言なり中昔はは懸の枕詞
物にもをきくれやほく見ゆ
あり珠とハ古は何物にも玉をかけるのみから
こと多くて、見る目を文音れけやけきともきりを
珠衣珠裳珠簾の類多あり衣の名なり〇懸乃宜
あはゐ此物も然有しるかれり義の名なり〇懸乃宜
久比尓て衣手ゆ掻上る義の名なり〇懸乃宜
久懸とは言にかくるかれり掛巻も畏き詞
ハ反哥尓云り玉乃小琴云宣しきといは更ちて久々と
云るに心をとゝくゝしこは六句を隔て下の朝
夕爾還比奴礼婆を云処へかゝる詞にあ一首
れ眼ありそをいかゝる意をと云ふ旅ふてはは
早く本国へ歸むことを願ふ物かる故に還と
云ことを悦あり然る尓今行幸能山越風の
吾袖に朝夕かふく吹来るを懸乃宜久そは
よ処るかり野雁云俗ヨイヤ云こゝろかり彼業平朝臣
のうらや万志くもかゝる浪のかと云哥ともを
思ひ合をゝし此詞と遠神云へかけて見る
をむのおやをかりと十に子等名丹関之宣

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

朝妻之云々○遠神天皇は凡人とは遥小遠
く導く可畏く坐そよしの御称かり○吾大王
乃ハ上葉に云り○行幸能　行幸ハ出座か
り○山越風乃ハこととをることとかし○獨座
こゐも○吾衣手雨　衣手は即衣ニテ袂り○朝
夕雨　聞えたるまゝ　袂り○還比奴礼婆　還
比ハ還りの延語かり　丈夫登　大夫は真丈夫
荒男ゐるはし真ハ何ふ万も美免禰〳〵て冠ら
しむる語かり　襲は熊襲万たゝ葛城襲津彦ゐ

杉の襲尓通もて徒く稜威逮き意の言良哀は
荒男ゐるはし十七安良志乎須良爾奈氣伎
布勢良武二十に阿良志母多志夜波婆可流
不破乃世伎　阿良之乎乃伊乎佐太波佐美ゐ
との荒し男ゐ同く聞も男子ゐ雄〻しき美禰
にて手弱女や反対ゐをの○念有我母　聞ゆる
の如し○草枕は旅の枕詞ゐり冠辞考云万葉
一尓草枕客爾之有者　即此のこは五尓道乃久
麻尾尓久佐太哀利志婆ヲ利志伎提と有る如

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

く草を結く枕やそゆかしにく旅尓は冠らむほかり此哥は當本宮の御時かる尓言馴へけり下代より云る詞なりけり○客爾之有者　之は数多の中より一と取出る辞なり然るをたゝ助辞とのみ見るは精しから文心ゆ着ほし愛ゐ大夫と思へる我も客尓てはの意ふく客と云ものと一ッ取出たる辞なり○思遣ハ思を遣り放るなりかる想像とおなじ○鶴寸乎白土　鶴寸ハ手着の借字にく釈

寄や云はやのおとなりを白土も借字尓て知らぬと通ゐ言なりされ哥其意は知ら文や云尓似く其よりは用ひさる輕し○綱能浦之　和名抄讃岐國鵜足郡津野郷

○海處女等之　處女ハ名義小ニ卿ねと見ゆ女かり小利子小對へる称ねど小ハ大に對いて若き方の美称利ハ利心ねと聡き意尓云ること多しこは女の若きを云称なれ娘集中處女童女未通女なや書るをたゝ若きを主やきてなり字尓

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

く草を結く枕やそゝにく旅ホは寵ら志
むはかり此哥は當本宮の御時なる本言則し
ゐいけりて上代より云る詞ぬそ
けり○容爾之有者シは数多の中より一と
取出る辞ぬり然るをたゝ助辞とのみ見るハ
精しから文心ばえ着ほし愛ハ大夫と思へる我
も容ニてはの意ふく容ニと云ものと一ッ取出た
る辞ぬり○思遣ハ思ひ遣り放(サケ)るなりと想像(オモヒヤル)
なり○鶴寸乎白土 鶴寸ハ手着の借字にく牧

寄や云ほやのおとなり白(シラニ)土も借字ホ而知ら
ぬと通ゐ言ぬりされぬ其意は知ら文や云ホ
似く其よりは用ひさ而輕し○綱能浦之 臨
時祭式に讃岐國綱丁和名抄同國鵜足郡津野
郷ぬと見ゑ○海處女等之 處女ハ名(ナノ)義小利(ヲトリ)
女(メ)なり小利子(ヲトリコ)小對(ヲトリタ)へる称ぬそ小(ヲトリ)は大に對して若き方の
美称利ハ利心ぬと聡(サト)き意ホ云ること多しこ
は女の若きを云称(ナ)ゐれ婆集中處女童女未通
女ゐや書るをたゝ若きと主(ヌシ)やそゝてゐり字ホ

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

そのう婆こいのも男せぬと云をと意得ゐや
刀りもそほし海人(アマ)ふさ浴別(ワキ)かきこと於り
六ま漁童女とゐるも同し○焼塩乃ハ下に如
と云言を加へて見ほし此格常に多のり○念
曾所焼　念ハ用言於り　念のやくると云意よは非文　曾ハ此
事ば強むる辞ゐり所焼をやのるへ於り俗言ハは
ヤケルと云り五尓心波毋延農かといと多し○吾下
情ハ志りこゐ為や訓は非(ヒカコト)ゐり拾遺集ま春は
ほとゝいきさかまおし思むと
りらふ志り心のれとゐ
名ゐを静心にて異於ゐを従駕(ミトモ)にて家を偲やさ

とゐ憚ゐる故ま下情や云り上の裏歎(ウラナケ)や相證
そへし○一首の意はうらくと霞立(カスミタ)ゐ長き春
日の晩ぬる分別(ワキ)も知ら文むをゐら家を戀ひ
隠歎(ナケキ)ときは行宮ゐるま山ふきこそ風の旅れ獨座
ま當れり袖に朝夕ゐにかゝる日数のらに
いとゝ催ゐ孔て其かへほと云言そら好(ミ)せら
れ於ゝ丈夫と念へる我も旅にては懐を遣り
放(サケ)ん手(タ)寄(ヨリ)を知らね婆此ゐさりれ網(アミ)れ海女(アマ)ゐ
焼く塩の如く裏心に家を思むおのるゝそれ

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

り

又歌

山越乃風乎時自見寝夜不落家在妹乎懸而小竹櫃

時自見ハ時から更と云こと也長哥の心乎痛の処小云り此見を云辞のおも長哥の例ハ古事記傳十五巻五登岐士玖いほを考合へし古事記傳十三葉

能迦玖能木實の解云書紀小云ゝ令求非時香菓云ゝ登岐士玖をは書紀の字乃如く其時非らぬを何物ふても云万葉一に山越乃風乎時

自見風の時から更と寒さを云又三笠野之耳我嶺爾時自久曽雪者落等言三に時自久曽雪者落家流不盡山の哥又冬木成時敷時跡不見往者筑波山れ哥り此ハ登哥又冬木成時敷時何時何時来益我背子て見ぬさ時ゆ非更四ふ何とてを云意ぬり時自異目八方何時と云こと也ハに非ぬやハあら免ハり時藤之目頬敷六月の十三ふ小治田之年魚道哥り之水乎云ゝ時自久曽人者飲云暑く水飲へき時ふ非るを云十八ゆ等枳自家米也毋四巻なるにぬしるかをゆるふ然るを時分て意得へしぬ常よ愛らぬ意に見ほはいさゝの違へり其も時から

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

文やうたのはうも聞ゆるをあれにて橘子（タチバナ）を然（サ）云故ハ云〻時なからぬこゝろにを何時（イツ）も物ゝ礼は忘ととゝのり爰も長哥に長春日とありて四月に還宮（カヘリキ）ゐたゝよし紀に見ゆ礼婆真間（ホト）、の事

なりけむと山風の時なから更寒かをしかり山越と云に心と汲くはゝし〇寐夜不落　不落ハ不漏ぬり祝詞尓嶋之八十嶋隆事無続紀十宣命ま漏落事（モラシニアトス）母在乍加止云く俗言なれたちの無ると云りおちと為たちり越度の義にをあら次

然にて橘子を然云故ハ

何時も物ゝ礼は

長哥に長春日とありて四月

礼婆真間、の事

山風の時なから更寒かをしかり山

〇寐夜不落　不落ハ

之八十嶋隆事無続紀十宣

俗言なれたちの無

為たち

漏處（モラシニアトス）

一夜も不關（セ）云意

ぬり〇家在妹乎　那流は爾在れ約かを妹の

こゝハ古事記傳三巻四十葉に精し披き見へし〇

懸而小竹櫃　此懸ハ此（コナタ）方彼（カナタ）方に亘るを云言

ぬり言に彩（カク）心小彩（カク）かとは異かり真よしハ次に云を

うし武藏かる男京ぬる女の許に云く京をり

女武藏鐙（アブミ）けたの尓かあく頼む尓をとはぬも

ぬらしとふもうるさし此かけても京より武

藏を懸（カケ）そかり又兼官（カテ）妾（メ）ぬとも二方に亘るは

云り俗（ヨ）にもかけ合かけ向（ムカ）ふかをも云り爰も家かる妹と旅を

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35

ガラス使用

乞慕(シヌ)ふ心は報り又長哥の懸乃宣久は言(ヘ)ま
(カクル)衆(ヨ)よく記(シ)のくる問かくる
十三ノ末技(エ)も知引懸仲技爾伊加流我懸下
技爾此米乎懸古事記に於中技取繫八尺鏡か
との如く物に物を衆(カクル)と云(ヘ)く小竹櫃八慕(シヌ)馬(ヒツ)
異(カ)りくセ又ハ混ふ(ハ)し小竹櫃八慕馬(ヒツ)
り志奴布ハ志那布ヤ通(シ)むく三小真木葉乃之
波受(シテ)而十一ニ吾妹兒乎聞都賀野辺小竹(ミ)かと
能雘(シテ)ニ合歡木吾者隠(シヌビ)不得間無念者
の雘(シテ)む(ふ)も如く小竹(コヒ)も雘(シテ)ゐ心のおほるくと
云り人を慕ふにハ然(カク)ハ隠忍(シヌフ)も人に知らもしとも
(カクル)るもれかれはゐり又
より云(ヒ)堪忍(シヌフ)も已とおもはしむるにく皆本ハ

一言(ヒト)り〇一首の意ハ山風の春ともあく寒
(カレ)よ旅れ獨宿(ヒトリネ)とゑのねて一夜を闕さ夫家(セ)ゐ
る妹を遥ゐ慕(シヌ)ひ(ハ)りゐ

右撿日本書紀無幸於讃岐國亦軍王未詳也但山
上憶良大夫類聚歌林曰天皇十一年己亥冬
十二月己朔壬午幸于伊豫温湯宮云く一書云
是時宮前在二樹木此之二樹斑鳩此米二鳥大集
時勅多掛稲穂而養之乃作歌云く若疑從此便幸
之歟

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

此注は無下ニ後人の所作(シワサ)ニ非り又類聚歌林
と云物も憶良れ名を假ると偽書あるへし
なし万葉考ニ論(ふ)きそるの如し一書云云く
は伊豫國風土記ニ見えそる趣ニ非り

明日香川原宮御宇天皇代　天豊財重日足姫天皇

此天皇後の漢様乃御謚(ミナ)を皇極天皇とも齊明
天皇とも申そへ飛鳥小墾田宮に天下治志
志御代れと皇極を申し孝徳天皇を聞(キク)ニ再び
飛鳥板蓋宮ニ飛鳥川原宮ニ飛鳥岡本宮

小天下治シ御代のと齊明を申そりかく
此天皇ふしゑ二れ漢様乃御謚ニ非かる
るふらゐらむ物ふも見えさること勿きを神
皇正統記に云らく我朝ニ皇極れ重祚ニ齊明
と号し孝謙の重祚を称徳と号次異朝ニ異れ
り是天日嗣を重くそほ故の先賢の義定ニく
よしゐるよやとゐれとそい大(イタ)く誤きる説ニ
ゑ其故を万川孝謙天皇の御事は続紀を考ふ
るに天平宝字二年八月ニ宝字称徳孝謙皇帝

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

と申す尊号(オホミナ)八現(ウツシ)御代ゟ奉れるにて御諡ふも非ず又孝謙と称徳と離ちて両度の御名よも非ふ然後世の物にては孝謙癈帝称徳やに皇極いてゝ其據を知らず見ゆもとすべり又天日嗣を重(オモミ)せら齊明れ例に引ほは違へ也ほゝ故ゟ御代別ゟ御諡を立られたりやせ婆正しく皇國ふりの御諡(ミオクリ)をこそ今一(ヒトツ)立(タテマツ)奉らるべきを天豊財重日足姫天皇と甲ゟ凡ゟ天此天皇の正しき大御諡ゟ時ゟ号(ツケ)奉(マツ)る例(コト)ゟて皇国ふりれ正しき御諡かり漢様のは後世にゟさと撰られたるものにゟ素ゟりれ御諡ふはゟら史此事は古事記傳十二巻三葉に見ゆ八こはさい書(カキ)もし詔(ノリコト)もそるに便宜(タヨリヨ)から撰られけむ當世ゟは然(サ)る類れ事多し桓武紀ふ延暦十年三月癸未太政官奏言謹案礼記曰天子七廟三昭三穆與太祖之廟而七又曰舎故而諱新注曰舎親盡之祖而諱新死者今國忌稍多親世亦盡一日万機行事多滞請親盡之忌一從省除奏可之とあるゟ物をも思はし一日

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

万機行事多滞をいるを以も皇国風のいや長
やのめる御称(ミナ)かとは便宜(タヨリ)うらをも思はれあ
む當(ソノ)世の面影もらもたり書紀私記に師説神
武等諡名者淡海御船奉勅撰也といふに時代
も合へり古事記傳にも垣武のこもによりて
御時ありしとのり
按ふよ此天皇に二乃御諡(ミオクリナ)いるは御代の次第(ツキテ)
と別むた免にもそあるほきさゝ此哥ハ川原
宮小御宇(アメノシタシロシメス)ー、聞(ホト)の作(ツクル)ありける延暦十年三月癸未の
辞別(コトワキ)く云む右ふ引る

太政官れ奏こを心得かをくはあをけも其
故は漢國の格(サダメ)ふ七廟の余(ホカ)は毀(コボツ)を云(ヒ)ふ舎親盡
之祖とも云へる起原(コトノモト)ハ彼國習(ナラハシ)として萬と
きはやふ理免くをたけきこを不思へる
ふら國忌(キサイ)ふとの細かる禮(ワサ)を定免てことく
しくもくるせ母そは當(ソノ)時の人れ思慮(コヽロ)に
て世く經るまいに其事多くかもい甚(イト)煩ら
しく堪かをうるにより中間(ナカラ)をもてく本末
ともものをる禮(ワサ)ありふ然るをあふ舎親盡之祖

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

とハ例れ言巧くこそ云るホこそ実には九
等の余も皆同し親かるものを其をみ舎
やハ甚こゝのるフしく刻薄きさされ極かり
然るを皇国ふく親子をハ幾継よも直く
皆同く親かり父母は意夜の中に寐も親き
り又直子はみり父意夜母意夜を云
りこは子の中に産る故に産子と産
故皇祖を御意夜皇祖を日之御子と申して
萬おとゝろこをふく又国忌ゝと云おとも
元来のほことふく大らこのホしのまゝ礼婆

万機に礙らゐおとかゐてもゝのら私ほ故ホ
萬代ホ及ゝを祭祀を絶ふゝう如き究廻た
る禮ハ死りけほさを彼漢国の虚禮とゝも信
にうけうきて祀らるる陵墓れ員ゆ定免く
其余のとは皆舎られたほのら上代れ御名
高き天皇等のも甚ほいふく稀かりそを
く今世のはかるき庶人そら祖先れ知らる
ゝ限は祀と絶こをかけき婆かりそ免るる
墓所ゝホ常ゝ経に變ら更在るさるをはし

もいみもろく造り乱て永世れ山陵を標(シル)り
たる地(トコロ)としも荒田の面にそきかゑしくも
さりもぬくふりぬるは全(ニシラ)この延暦れ格(ミヲサダメ)尓
そほこそ尓て甚(イト)も可畏きおそれ限に
ゐむありけ礼
額田王歌 未詳 後人の所為なり
天武紀云天皇初娶鏡王女此王の世(ヨ)系(ツキ)ハ知ら
巻云鏡王は近江国野洲郡鏡郷
小住(ヲスク)を然は弥(ヤ)ゐ王勝間櫻落葉
市皇女と見也さを又、、天智天皇の東(ヒムカシ)ノ

宮にゐしけるほをよそ娶(メシ)たそしおやは此集
中尓往(トコロ)〻見えたるを天智紀の后妃宮人れ列(ツラ)
尓見えぬは皇子まにゝ記れはるゐしかくく

此天皇崩(カムサリ)の後尓天武天皇おを娶(メシ)たてまつり十
市皇女を生(ウミ)まれしかくく

地名を聞ゆるとそを下ニの三に云り又鏡女
王と申しはさの御姉ゐり本集二巻
御名の由も近江の

金野乃美草苅葺屋柴禮里之(アキノスノヲハナカリフキヤトレリシ)
磯所念(イソニオモフ)
道乃宮子能借五百(チノミヤコノカリイホ)

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

金野乃　金字ハ秋は五行の金尓當るや云漢
説より出而〇美草芽葦美草は尾花なり
名義ハ穂の状乃物れ尾小似あるをしてる
（穂花小ハ非）（美草ヲ書をしは彼七草と算ふる中
に此草ハしも花のむ孫くさまはあらず
草のさ万乃いや免てさけも婆かるほし又集
中よ草（カヤ）花ヲ書ほも草かのら花や見ゆれ婆る
り然ら更をむねやの草花を除（ヌキ）く是をしもさ
を書ふしきをさおるを思ほしにて此美草を

尾花と決むるをしは八に御在左大臣長屋王
佐保宅肆宴御製波太須珠寸尾花逆葦黒木
用造有室者迩万代　青丹吉奈良乃山有黒木
用造有室戸者雖居座不飽可聞とあるか同く
黒木もて造もる宮になるを云尾花ハ逆葦せ
ら礼しおり（穂の見ゆるほくそは行宮の御情（ミヤヒ）や
逆に菁るおそ
そにをさやの御をは尾花よや有ける玉乃小琴（アカ）
はもをほ大嘗祭儀式の美草を尾花一種尓は引（ヒ）く證
屑らさるおや美木まさ雑美草木あとも有を
以知へしはもは尾花か
る證よを立さるをや
〇屋杼禮里之ハ宿有

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

しかりやはりしかはい
さゝ〳〵ことめりり○菟道乃宮子能菟
道ハ山城の宇治なるはしさて此天皇紀元
年冬十月の頃より二年冬十月頃まて川原宮に御座し
なと見えたるに其間何處へも行幸の事もなけれ
ハ是ハ誤りなるに彼紀は誤りをさとらさるかて
五年三月戊寅朔幸吉野宮而肆宴焉庚辰天皇
幸近江之平浦なとある近江へ幸の事ハなかへし
然も猶毋此は秋哥なれハ紀に合ねとそれはゝ紀の誤と見えたり万葉考ふ

も此を論ひく云紀ハ誤なるはし其故ハ凡そ
遠幸ハ百官御供仕へ万たり経たまふ国
ゝゆもりてゐみ志き御事なるを一日に吉野
へ幸し〳〵三日に近江へ幸そはきふたらね婆
紀ふ五年三月近江へ幸とあるは誤にそ二年
秋の幸かりしこと此哥を證をそはしとゐる
はいやそしある考かり然らは其時の路次ふ
山城ゟ宇治の行宮にての事とよみ万せる御
哥かるはし新勅撰集羇旅部ふたそのかはら
の御時あふみふみゆき侍けるよ

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

よみ侍ける額田王秋れ野をはゝかりふさ
やときりしうちのみやゝ思
ふを載られさるはをく宮子ハ宮處ゟてかり
考へ〳〵物せらきけり
そ先ゟも皇居ゟ処をは云り○借五百(磯)所念
借五百ハ假廬ゟり廬とは假そ先ゟる小家を
云名義ゟ川伊保を伊保里の省にて〳〵伊保里
ハ家居の約ゟり十よ戀ゟ(ハ)蓑稲葉極別家居者
六ゟ河口之野邊爾廬(イホリ)而夜乃歷者ゟとゟて意
得ゟくそは実乃家ゟら(ん)ゟ假よ其状にて〳〵居よ
しの名ゟり居と云よ眼ゟ(ん)ゟ着〳〵しされは旅宿

○書紀ゟ軍陣の営と伊保里ゟ訓るも同一

れこゝゟ多く旅の廬と云と又秋田苅假廬とも
云と五よ布勢伊保能麻宣伊保乃内ゟかゟ云る
も淺はかなる小家ゟり。磯(シ)ハ数多の中ゟゟ一
と取出る辞ゟるよし上四十四葉よ云り所念(オモヒ)ハ思
ほると云ふ同し○一首の意ハ女王乃御身ふ!
て彼尾花かりぬき宿れりし行宮れゝの更今
ふ思ほゆとゟりけハあれこゝゟ一ッ疑ゟ思ゟ
ことゟりけるハ一首の表ハ今説(トク)るゟ如くゟ
く裏(シタ)にこゝろのゟりけゟゟ聞ゟるそしくハ

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

此王の度ハ未東宮ニ(イマ)(ミヤ)(マ)奏(メサ)れさりし時ホ(ヲ)(ヲ)(ヲ)

そこやかる意味を聞きるに大御哥を志
ては事れはま違もを孔塞かぬくに此一
書ハ取用かぬくれむ

幸于紀温泉之時額田王作歌

齊明記云四年冬十月庚戌朔甲子幸紀温湯
五年春正月己卯朔辛巳天皇至自紀温湯

莫囂國隣之大相七兄爪湯氣吾瀬子之射立為兼五
可新何本

玉勝間藤靡巻云莫囂は加麻と訓へ加麻を
如此書るをしを古き人の物云を制もく阿那
加麻をいふるは其阿那を者く加麻とわみも云
ほらむそは今世の俗言ホを囂しきを制もの
やかましと云に同しやうなしは囂しを云こ
とるも婆かりと云ふ莫囂を云意ぬをはてかく
万山と云ハ神名帳小紀伊国名草郡竈山神社
諸陵式小同郡竈山墓を見えたる是ぬり此御
墓は神武天皇の御兄五瀬命の御墓にく古事
記書紀ホも見えたり神社も御墓も古れ熊野

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

路近き處ふさ今もあり國隣も夜麻也訓ㇾ
山は隣の国此堺ある物故をは如此も書へし
國字ハ本ふハ圓也あぼ紙一本に國也の多於
也大相は表の草書と表の二字也見ゝ誤れる
るをもゝ此幸ハ齊明紀ふ四年冬十月庚戌し
朔甲子幸紀温湯とゐりて霜乃深くれく頃於
也七兄仇の七は木の誤仇ハ氏の誤るり湯字
とも謂ふ誤也もば一本ふ湯也於也吾瀬子と
は天智天皇の此時皇太子にそ万ㇾまた乎さ

してよ万きをり太子も此幸に供奉ㇾ賜万る
趣書紀ふ見えた事さて額田王ハ天智天皇乃
娶たりし事櫻の落葉巻ふ云るふ如しにる
をりゝ吾瀬子とはよみ賜万るより為兼は須
賀禰を訓ほし此句ハ此度いかゞしの本ふ立ゝく
た万ゝきさとゞをみ給へるより然ほをせ
りけむを訓ゝハ往時の事於をは物とほし五
可新何本ハ竃山神社れ最橿之本於りかくて
此哥を此女王も太子に従奉りて行た万へる

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

ふて太子れ竈山社を詣たまはむをれる日の
朝旦を霜の深くおけるふにきそなみ給へる
ほよにて一首の意はかくてを竈山に霜深く
て巖檀の木尓立給尓難かるへけきは吾兄子
の煩ふく立給ふへきた免なもはし霜の消む
を待てゆあかしを以上王とありそもく
此哥ハ故(コトサラ)尓異ある字(モジ)等(ドモ)をそりて書るから
尓やゝ古くそり訓誤まるほ万にを旧訓ハ
得もとのぬことにく有けるを荷田大人れ考

訂さをることを少しそ改しけにを有しら猶
まおとよはいとあうぬものおそ過へぬるは
右の玉勝間れ説よて始て明らのになりぬる
は彼王も天かあをてこうをしと思ほむのし
されを猶思ゐに此説にそは霜消てゆけと云
こと供奉人れと尓命にる詞ふかるおりそハ
吾瀬子之をあるにをりてあるへけれと必然
ふはあらしこい即皇太子ふ對(カ)ひく申し賜む
しるるへしさそも吾瀬子之と云て宜しき哥

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』 請求記号 837-35
ガラス使用

ねり吾瀬子與ヨ於也は然るを供奉人数と小係
いふまじきなり
く見るをきハ行けを云こと少し穏から更一
首の哥から名者色りよく味ない見ほー

○一後崗本宮御宇天皇代 天豊財重日足姫天皇位
後即位後崗本宮

齋明紀云二年云く是歳放飛鳥岡本更定宮
地云く遂起宮室天皇乃遷號曰後飛鳥岡本
宮也見色こは川原宮をり遷りましいるも

額田王歌

熟田津尓船乗世武登月待者潮毛可奈比沼今者許
藝乞菜

熟田津は伊豫國ふあをて古は寂名高き船津
なりき今ハいこのよあらむにて此哥ハ齋明紀小六年冬

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

十二月丁卯朔庚寅天皇幸于難波宮天皇方隨
福信所乞之意思幸筑紫將遣救軍而初幸斯備
諸軍器是歳欲為百濟將伐新羅云々七年春正
月丁酉朔壬寅御舩西征始就于海路甲辰御舩
到于大伯海時大田姫皇女産女嬰仍名是女曰
大伯皇女庚戌御舩泊于伊豫熟田津石湯行宮
熟田津此云
俯枳陀豆
云々冬十有一月癸未朔壬辰天皇度の事ありて天智天皇
此時皇太子ふと同く幸りし供奉に此王は妃
なるのらはのへありられてそ万またるあり

◎舩棄世武登舩棄と舩小棄ら叫るくとを
きを云りそハ舩の到着ことのこやを舩泊(ツテ)やを
云に對(分)ふ唱(十)ひを此下よ嗚呼児乃浦爾舩棄
為良武嬬嬬等之珠裳乃須十二四宝三都良武
香舩小棄うりらむとそは間(ヒ)よ潮来るハ裳裾
を濡(ぬ)にはしやを免るめをを既ホ棄くあらを
裳裾ホ潮ハ近にるさるにし三小百式紀乃大宮人之飽、、
田津爾舩棄将為年之不知久十二ホ柔田津爾
舟棄将為跡聞之苗如何毛君之所見不来将有
十九小往吉乃三津爾船能利云くこきら柔田津ホ舩棄三

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

津爾船能利い（ゝ）云
り船津かも（は）扱（ま）
高嶋之香取乃浦從已
おれらかて知（し）○又船泊のこゝハ、下（ムの）卅葉へ
に出ハ○月待者此句潮（ニテ）待者（ハ）ゝ云へきゝ月
と云昏く月を表（あ）せる巧（たく）り潮（ゝ）共（と）月
出れはゝり○潮（ゝ）可奈比沼此句裏（ラ）ゝは月
も出ぬゝ云意なる（ゝ）潮（ゝ）ゝ云ゝ月を表（あ）に（ゝ）
り可奈比沼ハ船出（ゝ）へき潮合（と）かりたる（を）
云りおゝ曉（アケ）潮（ニ）にそ（ゐ）りけ（る）○今者許（ゝ）藝（ゝ）茉

○熟（よく）る枝松浦宮物語に（遣）唐使の船に立（たつ）る（ゝ）歌（ゝ）
春日野（の）ゝ三笠山乃月影
いつのふれのり江（え）送（おく）らし（ゝ）
後世（のよ）ゝ誤（あやま）り（ゝ）は（ゝ）
此集の歌詞を（ゝ）採用たる処（ところ）ゝ（ゐ）
（因云此物語の文（ふみ）にも（ゝ）ゐ（ゐ）ゝ

今は漕（こぎ）将出（いで）かり（ゝ）乞（こ）ハ出の借字（かりじ）ゝ乞（こ）恭紀
小闘雞國造從傍徑行之（これを）
之曰云く且曰靡（テ）乞戸母（シ）其蘭（アラキヒトモト）一莖馬靡（テ）乞（此云異提戸母）
（此日）観自（皇）后則採一根蘭與於（ゝ）馬者とありゝ異
提（ゝ）乞求（もとむ）る語（ことば）なれはゝり菜は今然（しか）らむゝそ
る辞（ことば）なゝそハま川奈爾奴補（ヌフ）ゝ活用く言の中
尓爾ゝ奴ゝゝ音の座（スワ）る方（かた）なゝは（俗（ヨ）小云落（オチ）畢（着（ツク）かり）
竟の辞（ことば）小も云（に）花（はな）ゝき爾（に）け（り）月出爾（に）け（り）花さき
過（すぎ）去（に）し辞（ことば）にも云（いふ）を（往（イ）往（イ）爾（に）奴（ぬ）うせ奴（ぬ）の類（たぐひ）かり奈（な）と

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

と禰とを座らぬ音訛れは未然らける辞ぞ云
り春き奈は年のくも奈は花のさの禰は月の
い侍禰はの類訛り又余(ナホ)そる辞ぞ往(イニ)祢立(タチ)祢
かと云も未然(カニ)ぞ故奈と云結
らさは詞ぞ
玉藻苅手名、四よ行而早見奈五に加射之
爾斯豆奈かをみ川から然せむそをるふも云(ヒ)
小和多志多麻波奈須久比多麻波奈これらの奈と
十七よ美知乃奈加久爾都美可未波多此田伎
母之思良奴伎美乎米曳美多麻波奈佛足石歌
奈母やも云ぞ
應神紀大御哥小阿伽例蘆垣等咩伊

幷佐伽麼曳那髪長比賣を皇太子に賜へる御
哥ぞり佐伽麼曳那ぞ栄輝(サカ)那に
る御若き共(ドモ)むりこもは他(ヒト)の然せむことを云(ヒ)
ぬとるるへし
雄略紀歌よ阿毎儞擧曽枳擧曳儒阿羅毎矩儞
儞播枳擧曳底那こはかのごとら然(シカラ)有むこそ
云る例ぞ古事記傳卅一巻ホ二葉詞乃玉緒
七巻ホ五葉なそ説ふ年と那と
云る例(ドモ)書紀万葉の哥よ多し但し年ハ已のう
へも人のうへふも物のうへにも廣く用る
辞なるを那いみつのら然せむそはことふ
のみ云て他(ヒト)乃うへよもいはぬ辞ぞりおれ年
そ那ぞの差(ケ)別(タ)ありとの義門法師ぞ抑も
宜なへきぞ右ふ挙たる哥(ヒ)掌(タナ)は我う子れみふ
あら更他のうへ尓も自然なる事ふも云るを
や

然も婆此菜ハ将と意得て違ふおとおし〇一
首の意は熟田津を船出せむやもとて〻き潮(ニ)
待(ツ)間(ホト)尓月ひし出〻潮もよきほ柳尓かなむぬ
ひらは今ハ漕出なむ月をおも志後けれはと
なり

右検山上憶良大夫類聚歌林曰飛鳥岡本宮御宇
天皇元年己丑九年丁酉十二月己巳朔壬午天皇
大后幸于伊豫湯宮後岡本宮駅宇天皇七年辛酉
春正月丁酉朔壬寅御船西征始就于海路庚戌御

船泊于伊豫熟田津石湯行宮天皇御覧昔日猶存
之物當時忽起感愛之情所以因製歌詠為之哀傷
也即此歌者天皇御製焉但額田王歌者別有四首
此も後人の所為尓〻く論(イフ)ふもたらねを此(コ)よ
り川元年と云こそ無用(イラ)なり次ま飛鳥岡本
宮御宇天皇ハ舒明天皇ぬ申なるを伊豫
の湯尓幸しハ紀ふ十一年とのそ〻成
るもは違へり然(サ)らは異傳のそ思あに又月
日を合(カナ)ふさて七年云こより石湯行宮と

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

たるものにく

云々てゝ齋明紀の文はまゝなきを諭もか
く天皇御覧とり下ハ全く注者の意もて臆
説を云るなをめ中ゝ尓即此歌者天皇御製
焉とは仙覚の註釋尓引たる伊豫風土記よ
後岡本天皇御歌曰美枳多頭爾波豆丁美礼
婆云々(下文全哥は知なとゝらも之)を意得むか為ぬにて
御覧昔日猶存之物云ゝも其なるへし但し
大后をは當時の皇后を申おそ(後世小先代の皇后をか
不きりわと申はおとゝ称乃古き故思へは古記を

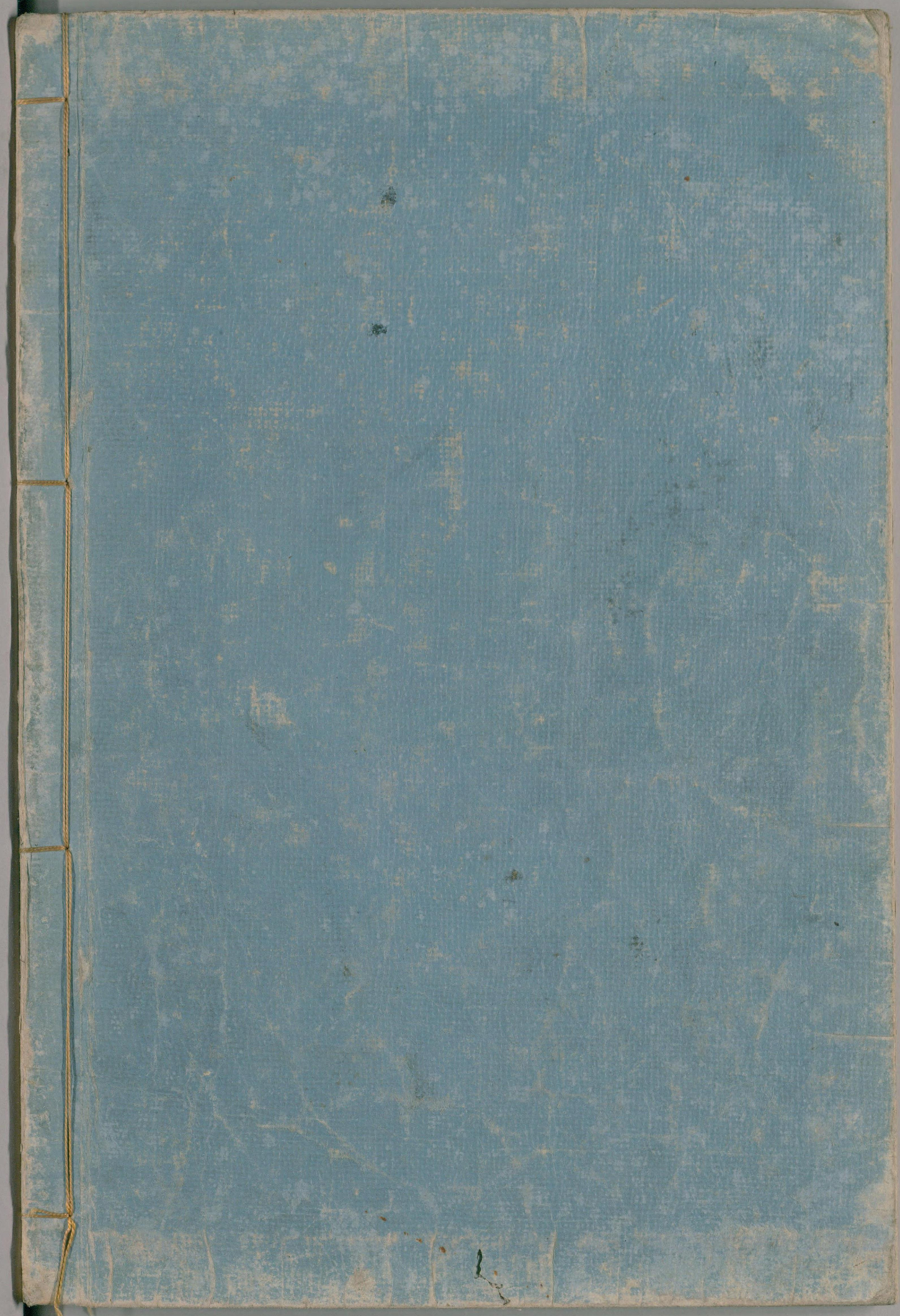
り物せりとは見ゑ但額田王歌者別有四首
と云おそを何書いのかるる哥ともいはゝ称は
遙たほ以の初し凡て此類聚歌林を人まと
はしかる事を多かる

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35
ガラス使用

837
4
35

国立国会図書館　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『万葉集新考』　請求記号 837-35

ガラス使用